1959年1月31日第3種郵便物認可

週刊 うたごえ新聞

6／12 (1989年)

NO.1259

THE SINGING VOICE OF JAPAN
日本のうたごえ全国協議会機関紙
うたごえ新聞社
〒169 東京都新宿区大久保2—16—36
☎ 03(209)0638 FAX 03(200)0105
振替口座 東京2-5631 毎週月曜日発行
1部120円(〒25円)・月480円(〒120円)

どのような立場から撮るのか

創る #3 〈19〉

フォト・ライター 木村 松夫

撮影・馬場義雄

木村松夫＝きむら・まつお
一九四六年（昭和21）、東京に生まれる。
一九六九年、中央大学法学部中退後、雑誌編集、ルポ・ライター、印刷業などの仕事をする。
一九八五年よりフリーのカメラマン、ライターとして活動中。

母の記録

この四月に、雲母（きらら）書房という小さな出版社から『母は恋人——ある痴呆性老人の素顔』という写真と文章によるドキュメントを発行した。老人性痴呆で長い間施設生活を余儀なくされてきたわたしの母の記録である。社会が痴呆老人に対して、より理解を深め、そのひとたちを人間的な存在として扱って欲しいという願いをこめて出版した。

いわゆる「老人問題」がこれほどさわがれているのに、痴呆のお年寄りの実像が見えてこないのが現状である。痴呆老人を正面から捉えたわたしの本はそうした現状にショックを与えるものだったらしい。刊行以来マスコミは、著者のわたしが脅威さえ感じるほどに、この本を持ち上げ、好意的に紹介してくれている。昨年一月以来各地で展示してきた同名の写真展の東京での単独開催も成功のうちに終わった。

写真は魔物

一方、最近、写真というものは魔物であると改めて思う。

写真展をやろうと思いたったのは、八七年九月、撮りつづけてきた母の写真のネガを整理しているときだった。その年の四月に撮影した母の姿が、ネガの山の中から出てきたのである。それは二年前の九月に当時母が生活していた特別養護老人ホームから「徘徊や異常行為がひどいので面倒を見きれない」と言われたときの、うつろな表情とは見違えるほどに生きいきとしている母であった。

撮影した時点では、最近の母は元気になってきたと感じることはあっても、これほどとは思わなかった。わたしは、写真という映像物をとおして、はじめてドラスティックな事態の推移に気づいたわけである。

写真展や本を見てくれる人々の評価が、わたしの想像を超えて高いのも、実は、写真がもっているこの「特別な力」によることが大きいと思う。

これが魔物なのである。それは、写真家がどのような立場から何を訴えようとするかによって、写真は生きもするし死にもするものであり、あるときには一八〇度違った意味をもってひとり歩きさえしかねない危険な要素もはらんでいるということなのである。だから、発表にあたっては、けっして事実以外のつくり話をしまいと心に誓ってきた。

人々と共に泣き、笑い

いかに精気を取りもどしてきたとはいえ、いつも、夢を見ているかのような、捉えどころのない表情の母ひとりだけをフィーチュアして三十枚の写真を構成する仕事は、困難をきわめた。そして、完成した作品のうち、いちばん良いのは姉が撮影したわたしの映っている写真（写真㊤）、つまり、ルポルタージュの担い手が同時に主人公のひとりであるという、実に、おかしなものとしてできあがった。

社会問題の報道は客観的で中立的でなければならないということから、報道者は対象と距離をおくべきであるという信念が一般にあるのだが、ここでは、わたしはあえて、ジャーナリストも社会人のひとりであり、この世の中で息をしているかぎり、自身の中に「社会問題」が存在しているはずだと言いたい。

いろいろな意味で『母は恋人』の出版は新しい冒険であった。それが成功であるか否かはまだわからない。だが、わたしは、これからも、社会の動きに主体的に関わり、人びとと一緒になって悲しみ喜ぶジャーナリストとして、自らを研鑽していきたい。

（文中見出し編集部）

〈136〉

ふめんだい

私にも田舎に、おふくろがいる。申しわけないことに、今年いくつになったのか頭にない。よく考えてみて、七十五歳だということがわかる。いや、七十六歳かな？

さんざん面倒をかけておきながら〝自分一人で一人前になった〟つもりで、いつの間にか、キレイさっぱり頭にないという日常だ。

☆ ★ ☆

若さというものは、傲慢なものだ。いや、若さのせいにしたのではいけない…などと、フォト・ドキュメント『母は恋人』を見ながら、読みながら、しみじみと身につまされてしまった。「母は恋人」と言えるのはいいなァ…。

☆ ★ ☆

それにしても「リクルート」に象徴される政治を根元から変えないと…。

ちょっと、論旨に飛躍がありそうだが。

いや、これも真なのだ。

（そ）